一茶研究史序説

尾澤喜雄

一

言うまでもなく、一茶研究史は、一茶研究の史的展開の考察であつて、個々の一茶研究の様相を究明するとともに、それらを貫ぬく一すじの流れを辿つて、今日の一茶研究が如何にして生じたかを探究し、その間に存する展開の必然性を明きらかにするところに、意義がある。今後における一茶研究も、このような一茶研究史の慎重な検討を通して、確実な根拠が与えられ、正しい方向を示唆されることが少くないであろう。

併しながら、真正な意味における一茶研究史の完成は、なお将来に残された問題であつて、現在においては、個々の研究の調査や研究者の事歴、あるいは、それら研究のよつて来たる因由もしくは影響等、いわば研究史の基礎的考察ともいうべき事柄を、一つ一つ丹念に成し遂げて行かなければならない段階にある。

本稿の所論は、このような段階における一茶研究史に一つの体系を与え、その全貌を髣髴せしめることを主眼としたものに外ならない。

二

滔々と流れ来る川の調べを耳にする時、誰しもまず、その流れのよつて来たる水上（みなかみ）に思いを馳せないものはあるまい。一茶研究史の流れを考察するに際しての第一の課題もまた、一茶研究史の開始の時期如何という点にあろうと思う。これに対する答えは、研究の意味を広狭の二義何れに解するかによつて、おのずから異つて来る。もし研究の意味を、自覚された探究の精神に基ずくものと、狭く限定するならば、一茶研究開始の時期は、正岡子規等を急先鋒とする俳句革新の潑剌たる雰囲気の中に一茶の批判的研究が胚胎した、明治二十五六年の頃に求められなければならない。併し私は研究の意味を広義に解し、たとえ明確に自覚された探究意識によらなくても、結果において、研究の実質をそなえ、もしくは研究を志向するような諸業績は、これを研究の領域に入れて考えるのが実情に適しているように思う。何れの研究においても、その初期の段階にあつては、明確な探究の精神によらない素朴な研究の見られるのを常とするが、一茶研究にあつては、特にこの感が深いからである。このような視点に立つ時、一茶研究史の始源は、文政十年十一月、一茶が波瀾に富む六十五年の生涯の幕を閉じた直後、門人西原文虎によつて「一茶翁終焉記」の書かれた時期と

するのが、最も適当と考えられる。何となれば、本書は、一茶追善の情を一管の筆に託し、「往事を述べて後の記念としるし」たものであるが、そこには一茶の全生涯にわたる経歴の概観が述べられて居り、一茶の生前彼に対する研究と認むべきものの何等存在しなかつた後をうけ、おのずから一茶評伝書の先駆ともいうべき性格を形成しているからである。

爾来今日に至るまで百二十五年を経過し、この間に刊行された一茶関係の図書は、管見に入るものだけでも約二百冊に達し、その他諸書に収録された諸家の一茶研究、講座・雑誌・新聞類に掲載された一茶関係の論考に至つては枚挙に暇なく、考察の広さと深さを示す注目すべき研究も数多く現れている。まさに芭蕉・蕪村の研究と共に、我が国俳諧研究史上における一偉観たるを失わない。

三

併しながら、一茶研究におけるこのような成果の大部分は、近々三四十年の間に挙げられたものであつて、それ以前の研究業績は、極めて寥々たるものであつたことも、注目されなければならない。そもそも一茶が俳壇や学界において一般に注意されるようになつたのは、一茶同好会から「七番日記」や「俳諧寺一茶」が刊行された明治も末に近い頃からであり、一茶研究が急激な勢で進展したのは、一茶の郷里信州柏原や長野市で一茶百年祭が盛大に営まれた大正十五年前後からである。この頃になると、研究資料も次第に多きを加え、新説や新考証も続々と現れて、多彩な研究が繰りひろげられるようになつた。このように西原文虎の「一茶翁終焉記」に始まる一茶研究の芽生えが確固とした拠り所を得るまでには、およそ百年に近い歳月を必要としたのである。考えて見ると、そこには永い草創の時代が横たわつていたわけであつた。

これは一面から言えば、一茶研究の道程の嶮難さを物語つているものでもあつた。その俳風に独自のものを有していたとは言え、俳壇の主流から隔絶し、晩年は地方の一遊俳として、荒涼たる北信濃の雪の中に埋れ去つた一茶を、広く一般に認めさせることは、容易ならぬ仕事であつたに違いない。たゞ一茶を敬愛する郷土の人々の、密やかなしかも絶えざる情熱と努力とが、一歩一歩一茶研究の礎石を築き上げて来たのであつて、これらの人々の精進なしに、今日の一茶研究は到底あり得なかつたと言つても過言ではないであろう。信濃教育会の真摯な活動や、一茶顕彰の為に総てを投じた一茶同好会主中村六郎の存在は、すでに多くの人々の知るところであるが、明治時代において最初に一茶研究の気運を郷土に導入した小平雪人や、一茶顕彰の先駆的役割を果した山崎素郷・小林五雲・中村六左衛門・小林彌左衛門等の諸氏の業蹟、あるいは玉声会（後に茶馨会と改称）の活躍などについて、知る人は少いであろう。これらは厳密な意味において、その悉くが研究史の領域をなすものではないかも知れないが、研究史に密接に連関する重要な事柄といえよう。一茶研究の史的考察をなすに当つては、これらの人々の蔭の力を忘れてはならない。

註　山崎素郷や小林五雲のことについては、長野縣上水内郡柏原村俳諧寺一茶保存會編一茶百二十五年祭紀念文集「一茶まつり」に掲載された拙稿「一茶研究史に連る人々―山崎素郷と小林五雲」参照。

四

百二十五年にわたる一茶研究の歴史は、これを草創期・興隆期・反省期・新生期の四つの時期に分かつて考察することが出来る。

ここに草創期というのは、一茶研究が開始されてから、それが研究の大道を歩むに至るまでの間で、大体文政十年西原文虎によつて「一茶翁終焉記」が述作されてから、大正二年一茶同好会が「一茶遺墨鑑」を刊行した頃までを指すのである。これを更に前後の二期に分ち、その境界を俳句革新の清新な雰囲気の中に明治時代の一茶研究が芽生えた明治二十五年頃とする。

次に興隆期は、一茶研究が急激な勢で高まつて来た一茶百年祭前後の期間で、「一茶遺墨鑑」の刊行された後から昭和八年頃までを指すこととし、反省期は、興隆期の後をうけて一茶研究に反省や整理が加えられ、更に新しい展開をした時期で、昭和九年西谷碧落居の「一茶の再吟味」が出た頃から昭和二十年太平洋戦争の終末頃までとする。共に一茶研究史の中核をなす部分である。

最後に新生期は、終戦以降の新しい研究をはらむ時期をいうのである。

もとより如上の区分に対しては種々異つた見解も成立つことであろう。草創期の終末を一茶同好会から「七番日記」や「俳諧寺一茶」が出版された明治四十三年頃とし、あるいは興隆期と反省期とを区別しないのも一つの行き方であろうし、又各期の名称の与え方についても別の立場をとり得ることが当然予想される。このように考慮の余地はなお多いであろうが、大別して以上の四期とするのが便宜であるように思う。

五

草創前期は、文政十年西原文虎によつて書かれた「一茶翁終焉記」に始まる。これはさゝやかながら一茶評伝の先駆をなすものであつたが、以後引き続き約三十年の間、主として柏原を中心とする地方の一茶門人達によつて一聯の活動が行われた。即ち文政十二年主要な門弟十四人によつて文政版「一茶発句集」が刊行され、作品蒐集の端緒を開いたのを始めとして、立花宋鵜による「一茶発句鈔追加」の編纂（天保四年）、今井墨芳による嘉永版「一茶発句集」の発刊（嘉永元年）や房総地方における一茶足跡の踏査（安政年間）、風間新蔵による八番日記の筆写（嘉永四年完了）、白井一之による「おらが春」の出版（嘉永五年）、山岸梅塵による数々の一茶遺稿の書写（安政二年以前）など、不完全ながら一茶研究の基礎を形成する一応の布石はこの間になされたのである。これらの活動は一茶探究精神の発露というよりは、むしろ一茶を追慕し顕彰しようとする、より人間的な心の現れであり、又その収め得た成果も決して大きいとは言えないが、「おらが春」

や「一茶発句集」が一茶を世に紹介し、その研究の進展に基本的な役割を果した功績を没することは出来ない。併し、柏原地方における一茶研究はこれらの人々が、相ついで歿するに及んで次第に衰え、約四十年にわたるほとんど空白の時代を経て、草創後期に連るのである。

六

草創後期は、明治二十年代の中頃正岡子規等を中心とする俳句革新の活々とした雰囲気の中に胚胎した。この期に至つて、一茶は始めて真正な意味における研究の対象となり、多くの人々からその人や作品について自由に討究されるようになつた。草創の前期と後期を分つ主点は実にこの研究態度の相違にかゝつているのである。とはいえ一般の関心は未だ薄く、一茶を愛好する人々の顕彰的な努力が熱心につゞけられた時代である。

この期において、逸速く一茶に着目したのは正岡子規であり、二十五年六月より翌二十六年一月にわたつて著した「獺祭書屋俳話」「歳晩閑話」「歳旦閑話」等に一茶の句の引用が見られるのであるが、一茶論評の口火はまず岡野知十によつて切られ、二十六年七月及び九月の「しがらみ草紙」誌上に、一茶と多代女及び曰人の比較論が掲載されたのを始めとし、続いて春秋庵幹雄も自著「俳諧名誉談」（二十六年九月）の一節に、一茶の略伝や、俗言を活す一茶俳諧の特色について論ずるところがあつた。爾後岡野知十・鵜沢四丁・飯島虚心等秋声会の人々の評論的研究が盛に行われたが、一方一茶の郷土においても、二十六年春小平雪人の柏原訪問を機として一茶研究の気運が勃興し、中村六左衛門・同六郎・山崎素郷・小林五雲・同彌左衛門等の諸氏の資料的研究あるいは顕彰的活動が展開され、これら二つの交流するところ、宮沢義喜・同岩太郎共編「俳人一茶」（三十年）、岡野知十校訂「一茶大江丸全集」（三十一年）を生み、又大塚甲山編「一茶俳句全集」（三十五年）も世に出ずるに至つた。併しながら一茶研究に飛躍的な展開を齎したのは東松露香、中村六郎両氏の業績である。露香は、三十二年四月以来信濃毎日新聞社にあつて、俳句欄を担当する傍、浪漫主義的な小説・随筆・紀行文等を数多く発表していたが、三十三年四月一日より同新聞紙上に一茶評伝「俳諧寺一茶」を百二十五回にわたつて連載し、一茶の人と俳風について評論した。これは、博く資料を渉猟し、詳かに事歴を考察し、それを懇切な筆で叙述する、量質共に劃期的な業績であり、「おらが春」と並び称せられる「父の終焉日記」もこの中で始めて紹介される等資料的にも貴重なものを多く含んでいるが、地方紙への発表の為広く知られずして止んだのは惜しむべきことである。六郎は、露香と密接に協力しつゝ、四十一年一茶同好会を設立して顕彰的活動に専念し、「七番日記」（四十三年）、「俳諧寺一茶」（同）、「一茶遺墨鑑」（大正二年）の三書を刊行した。この中、「七番日記」は一茶晩年の俳風や赤裸々な生活を窺う好資料として、「一茶遺墨鑑」は一茶真蹟の独自な風格を髣髴せしめる良書として、共に世評を高からしめたが、就中「俳諧寺一茶」は、露香がさきに信濃毎日新聞紙上に掲載した研究に更に十年の彫琢を加えて面目を一新した論考を収録

し、一茶評伝書の権威として不動の地位を獲取した。本書が出でて一茶は漸くその全貌を一般世人に露呈し、一茶に対する関心は急速に高まり、一茶研究はここに始めて揺ぎなき大道を歩み得るに至つたのである。この前後には、俳諧寺可秋の苦心編纂になる「一茶一代全集」（四十一年）や、一茶俳句評として異色ある渡辺千秋、同国武評「一茶俳句兄弟二色評」（四十三年成）も世に出ずるに至つた。

この他諸書に収められている一茶研究について一瞥すれば、「俳人一茶」には一茶の俳句評として著名な正岡子規の「一茶の俳句を評す」が収録され、「一茶大江丸全集」には岡野知十の「俳諧寺一茶の行状」「一茶坊と大江丸」外二三の論考が掲げられている。更に「俳諧寺一茶」には「諸家の一茶研究」の部に佐々醒雪「俳諧寺一茶」、沼波瓊音「一茶翁の特色」、飯島虚心「俳諧寺一茶」を始め十四人の一茶論を収め、巻末「七番日記に対する世評一般」の中にも大須賀乙字、石楠生其他の注目すべき一茶論を掲げてあり、「一茶遺墨鑑」もまた「諸家の一茶観」として沼波瓊音「一茶論」、真山青果「俳人一茶」等六篇の論考を載せている。これらはすでに発表された雑誌の論文や著書の一部を再録したものが多いのであるが、それらの雑誌や著書を容易に見ることの出来ない現在にあつては明治時代の一茶研究の展開を概観するに欠くべからざる好資料である。雑誌・新聞類に掲載の論文は非常に多いが、前記諸書に見えるものを除き、主要なものを挙げれば、宮沢義喜「俳諧寺一茶翁」（「国学院雑誌」三十年二・三月）、中島紫竹「一茶の性格とその俳句」（「卯杖」三十六年六月）、福田雨六「一茶坊の特質」（同、同年八・九月）、暉晴「詩人一茶」（「明星」同年九月）、東松露香「一茶の結婚と其生活」（「報知新聞」三十九年六月三十日・七月二日）、同「俳諧寺一茶の点式及其添削帳」（「信濃毎日新聞」四十年八月二十五日）、猪飼夜濤「俳諧寺一茶」（「無尽燈」同年六・七月、四十一年一月）、会津八一「一茶研究眼の変遷」（「文章世界」四十三年十一月）、同「俳人一茶の生涯」（「早稲田文学」四十四年一月）等である。

七

草創期を経て興隆期に入ると、一茶研究は急に活況を帯びて来る。これは、前期末「俳諧寺一茶」「七番日記」「一茶遺墨鑑」等の相つぐ刊行によつて、一茶の全容が当時の自然主義的社会に大映しされ、その共鳴と支持を受けたことにもよるものであるが、一茶百年忌の到来はこの気運を一層高め、四期を通じて最も活潑な研究が展開された時期であつた。刊行された一茶関係の図書が約七十冊の多きに達しているのを見ても、その盛行が察せられる。この傾向は大正十年一月小池直太郎編「一茶日記抄」の刊行された頃から急激に強まり、百年祭の営まれた大正十五年に至つて頂点に達し、以後次第に弱まつて昭和八年頃一応の終息を見せている。

この期における研究を資料的研究と評論的研究の二つに大別するならば、資料的研究は、前期の「七番日記」刊行の後をうけて、次々と新資料の発見紹介を行い、一茶関係の資料はほとんど全部出揃つた時期であり、評論的研究は、これらの資料によつて露香の「俳諧寺一茶」

の所論を更新し、新しい一茶觀の建設に努力したが、その完成を次の期に委ねた時代である。従つてこの期は資料的研究が主流を占めて居り、総括して資料集成の時代ということも出来ようかと思う。

資料的研究の領域においてまず挙ぐべきは勝峯晋風・荻原井泉水の両氏であろう。晋風は俳諧史家としての立場から資料研究に主力を注ぎ、大正十年「新選一茶全集」を公にして新資料の紹介や新機軸に富む俳句分類を試みて以来、「一茶旅日記」（大正十三年）、「おらが春稿本」（十四年）、「一茶七郎集」（同）、「一茶発句集」（同）、「一茶新集」（十五年）、「一茶一代集」（「日本俳書大系」第十二巻、昭和二年）等を次々と刊行し、一茶関係の新資料紹介とこれが集成に大きな役割を果した。とりわけ「一茶一代集」は最も浩瀚で、一茶の主要作品を部門別に手際よく収め、俳句・連句・書簡の部には成立年時や出典を考証・註記する等、一面学問的価値においても勝れている。井泉水もまた新資料の紹介に力を尽し、大正十一年東松露香の遺著「父の終焉日記」を刊行したのを手始めに、初学者を対象とした「一茶文庫」七冊（大正十四年より昭和二年）の編纂や、湯本五郎治所蔵の一茶遺稿を収録した「株番其他」（十五年）、「九番日記其他」（同）、「しだら」（昭和二年）の公刊、あるいは文庫本としての「おらが春我春集」（「岩波文庫」同）、「一茶七番日記」二冊（「改造文庫」、六年）の校訂、遺墨集としての「一茶」（「俳人真蹟全集」第十巻、五年）の刊行等多方面な活動を示した。なお大久保逸堂、栗生純夫校訂「一茶八番日記」（二年）は写本による校訂ながら、七番日記と九番日記の間の空白を埋める根本資料の提供であり、大橋裸木編「一茶俳句全集」（四年）は編輯の周密と規模の宏大な点類書中の白眉と称すべきである。相馬御風編「一茶随筆選集」（二年）もまた鑑賞用資料として注目される。併しながらこの期の圧巻は信濃教育会の「一茶叢書」編纂の事業であろう。この事業は一茶研究に確実な資料を提供し、延いては国文学研究の上にも貢献しようとする雄大な意図の下に、一茶遺稿を各方面各種類にわたつて蒐集し、大正十五年より昭和三年にかけて九篇十一冊・別篇三冊を刊行したもので、未だ編纂の完結を見ていないが、一茶に関する重要な資料はほとんど網羅され、校正の厳格、解説の懇切、索引の周密等良心的な編輯が全体を貫き、一茶研究の根本資料として永久に記念されるべきものである。

評論的研究の分野にあつては、人間味を本領とする文学観に立つて一茶の芸術と生活を新しく見直した荻原井泉水の「芭蕉と一茶」（大正十四年）及び「古人を説く」（昭和四年）、満腔の同情を以て煩悩人としての一茶を描いた相馬御風の「一茶と良寛と芭蕉」（大正十四年）、新資料によつて従来の一茶研究に多くの訂正と新説を齎した栗生純夫の「一茶新考」（十五年）、一茶の生活に犀利な探求を試みた川島露石の「一茶の種々相」（昭和三年）、国文学に関する豊かな学識を以て主として「おらが春」制作のからくりを明きらかにした山口剛の「西鶴成美一茶」（六年）、実証主義的な立場から一茶の作品を解明した松原地蔵尊の数々の論文（纏まつた著書はないが、「一茶断考」（「芭蕉」大正十五年十一月）、「おらが春断考」（「境地」昭和二年十二月以降数号にわたる）、「おらが春の和歌に就て」（「俳諧雑誌」五年一月）等を始め夥しい数に上

る》等、夫々独自の立場から一茶の人と作品及びその周囲について創見に満ちた考察を展開しているが、露香の浪漫主義的傾向に対して、何れも自然主義的な地盤の上に立ち、一茶の真実な姿を追究している点に時代思潮の反映が色濃く感じられる。かくして露香の「俳諧寺一茶」によつて一応確立された一茶観には多くの修正が要求されるに至つた。

なおこの期に始めて註釈的研究が興つたことも注目すべき現象で、単行本としては川島露石「一茶俳句新釈」(大正十五年)、黒沢隆信「一茶俳句研究」(同)、臼田亜浪「評釈一茶の名句」(昭和三年)があり、講座類に掲げられたものでは荻原井泉水「おらが春評釈」(改造社版「俳句講座」俳論俳文篇、七年)、雑誌では長谷川零余子・勝峯晋風外数氏によつて行われた「一茶句集講義おらが春の研究」(「枯野」誌上に大正十一年七月から昭和三年二月まで三十一回にわたつて連載)がある。これらの中「一茶俳句新釈」は出色の書で新見解に富み、「おらが春評釈」も清新な趣の捨てがたいものを有している。

この外一茶百年祭記念として、柏原村俳諧寺一茶翁百年法要会編「一茶翁集」(大正十五年)、長野市一茶翁百年祭記念会編「一茶翁百年祭記念集」(同)が刊行されたこと、「早稲田文学」(十五年七月)、「黄燈」(同年八月)、「蜜柑樹」(同年十一月)、「文芸」(同)、「藁筆」(同年十二月)等が、何れも一茶百年祭記念号を特輯して多くの一茶研究を収録したこと、及び一茶叢書刊行委員の論考が「信濃教育」(大正十五年五月より昭和三年十二月に至る)に数多く掲載されたことは、特筆すべき事柄であつた。

最後に諸書・講座・雑誌類に見える一茶研究については、その数が余りに多いので、前記諸家の著書や特輯号に収められているもの及びすでに述べたものを除き、それ以外に主要なものを挙げれば、勝峯晋風「一茶の生涯」(新潮社版「日本文学講座」江戸時代下、昭和六年)、各務虎雄「一茶序説」(岩波講座「日本文学」第八回、七年)、相馬御風「幼年時代の一茶」(佐々木博士還暦記念会編「日本文学論纂」、同)贄川他石「一茶」(藤村作編「日本文学大辞典」、同) Glenn; "Issa and Noziri" (Japanese Scrap-Book, 1932)、Max Bickerton; "Issa's Life and Poetry" (The Transactions of The Asiatic Society of Japan, 1932) 並びに臼田亜浪「一茶の偉大さ」(「石楠」大正八年九月)、近江益代「一茶小研究」(「改造」十二年八月)、田島福重「焚くほどはといふ句について」(「国語と国文学」十四年十二月)、宮沢潔久「一茶の芸術を通して見たる彼の思想的展開」(「国学院雑誌」十五年五・六・七月)、田島福重「一茶とユーモア」(「国語と国文学」同年六月)、宮田戊子「一茶私見」(「俳星」同年十一月)、鈴鹿野風呂「一茶の寛政紀行について」(「ホトトギス」同年十二月)、伊藤松宇「一茶の大帆」(「にひはり」昭和三年六月)、倉田行人子「一茶の句を味ふ」(「石楠」同年十月)、高津才次郎「一茶雑考」(「国語教育」四年六・八月)、志田義秀「考へさせられるおらが春」(「国語と国文学」七年八月)等である。

八

興隆期は一茶研究が最も隆盛を極めた時期であつたが、同時に一茶の位置も亦異常に高く評価された時代であつた。一般世人からは芭蕉・蕪村と共に俳聖と称せられ（中村六郎編「一茶選集」序文）、又芭蕉時代、蕪村時代に対して一茶時代といふ区分も行はれた（日本俳書大系）。併し一時の興奮が静まると、従来の行き方に冷静な反省が齎され、一茶研究者は前期に集成された資料を整理し再検討して新たな一茶観の把握を求めて行つた。ここに反省期の特色があつたといえよう。従つてこの期の研究の様相も前期の後をうけ、資料的、評論的、註釈的各研究が並び行われていたが、主流をなすものは西谷碧落居の「一茶の再吟味」（昭和九年）に始まり、一般大衆的読物ながらよく纏つている志田義秀「一茶一代物語」（十年）、異色ある大槻憲仁・宮田戊子共著「一茶の精神分析」（十三年）、これを更に深めた宮田戊子「一茶」（十六年）等を経て、伊藤正雄「小林一茶」（十七年）に達する評伝的研究にあつたと言つて差支えあるまい。就中「小林一茶」は犀利な観察と周到な用意を以て農民詩人としての一茶の輪郭を明きらかにすると共に、その生涯と俳風の変遷を考察して独自な一茶像を確立し、学問的な水準において一等地を抜いている。たゞにこの期において最も勝れた研究であるばかりでなく、露香の「俳諧寺一茶」以後にあつて最も傑出した一茶評伝といえようかと思う。なお纏つた研究というよりも論纂書としての性格の強いものに荻原井泉水の「一茶雑記」（九年）、「一茶研究」「新潮文庫」、十三年）、「一茶春秋」（同）、「一茶を訪ねて」（同）がある。何れも氏の多年にわたる一茶研究の所産であつて、随筆風の平明な筆致の中に一茶に対する深い理解と暖い愛情が示されているが、就中「一茶研究」は文字通り氏の一茶研究の結晶であつて、「芭蕉と一茶」以降の主要な研究をほとんど網羅し、一茶の生活と芸術について種々の角度から鋭い考察がなされている。この他高倉輝「一茶の生涯と其芸術」（十三年）、相馬御風「一茶素描」（十六年）、栗生純夫「土の俳人一茶」（十七年）、宮城謙一「一茶と芭蕉」（十八年）もそれぞれ注目すべき研究であり、松尾明徳「専念寺と一茶」（十二年）、新井一清「一茶と白斎」（十四年）、同「一茶と文虎」（十七年）も地方における研究として一顧の価値あるものであろう。

資料的研究にあつては、この期も荻原井泉水の精力的な活躍が続けられ、「父の終焉日記」（「岩波文庫」、九年）、「一茶俳句集」（同、十年）、「志多良」（十二年）、「おらが春一茶文集」（「改造文庫」、十四年）等の校訂、「一茶真蹟集」（十二年）の編纂、「一茶読本」（十五年）の刊行を行つている。この中「志多良」は新資料の紹介として、「一茶真蹟集」は遺墨集の決定版として勝れた業績であり、「一茶読本」は鑑賞用資料として特色を有している。他に小池直太郎校訂「一茶翁終焉記」（十七年）、栗生純夫編「一茶十哲句集」（同）もこの期の注目すべき収獲であろう。

註釈的研究では勝峯晋風「一茶名句評釈」（「俳句評釈選集」、十年）、暉峻康隆「蕪村一茶名句の鑑賞」（「古典文学叢書」、十四年）があるが、まず挙ぐべきは勝峯晋風「評釈おらが春」（十六年）であろう。本書は「おらが春」の最も懇切な註釈書であり、註釈的研究としては空前の成果である。なお「おらが春」その他の註釈としては藤村作註解「おらが

春」(「新選近代文学註解叢書」、十年)、志田義秀編「俳文学三種選」(十五年)、伊藤正雄編「註解一茶文集」(十八年)の註解も参考とすべきものが少くない。

諸書・雑誌類に見える論考としては、田島福重「一茶雑記」(藤村博士功績記念会編「近世文学の研究」、十二年)、黒沢隆信(「俳人一茶の教養」(「日本諸学振興委員会研究報告」第三篇国語国文学、十四年)や伊藤信一「小林一茶論—寛政紀行旅拾遺まで—」(「国語と国文学」九年七月)、片瀬喜雄「一茶日記断簡」(「文学」同年十月)、吉田長次郎「一茶さらば笠」(「俳句研究」十年七月)、片瀬喜雄「一茶日記断簡」(「近世文学」同年十一月)、森山啓「小林一茶論」(「俳句研究」十二年一月)、中村俊定「成美一茶の一資料」(「懸葵」十三年五月)、高津才次郎「一茶の作ならぬ勧農詞其他」(「書物展望」同十二月)、本田夏彦「一茶さらば笠異本について」(「獺祭」十四年一月)、片瀬喜雄「信濃文学—一茶のおらが春について」(「解釈と鑑賞」十五年十月)、宮城謙二「一茶と短歌」(「俳句研究」十六年六月)、内藤吐天「小林一茶論」(同、同年七月)等が主要なものである。併しながらこの期の末太平洋戦争の急を告げるに及び、一切の文化活動は衰え、一茶研究もその進行を一時停止するに至つた。

九

戦争による破壊は決定的であり、その惨禍は測り知れぬものがあつた。一茶研究も一時混乱と迷妄の中にその行くべき方向を見失つたかに見えた。併し戦後平和の回復と共に早くも一茶研究は力強く立ち上がろうとし、ここに新生期の黎明が訪れたのである。この動きはまず一茶の郷土より起つた。一茶の顕彰と遺跡保存を目的とする柏原村の俳諧寺一茶保存会は漸次その組織を強化すると共に、昭和二十一年以来一茶忌の厳修、講演会・句会・座談会等の開催、一茶研究資料の蒐集、一茶終焉の土蔵や俤堂の修理などに積極的な活動を開始した。又栗生純夫はその主宰する俳誌「科野」(昭和二十一年一月創刊)に拠つて一茶研究を強力に押し進めると共に、毎年一茶特輯号を出だして全国の一茶研究の結集を計つた。これらと呼応するかの如く荻原井泉水は「定本一茶全集」六巻の刊行を企劃し、第一巻「おらが春其他」(二十四年)、第三巻「七番日記上」(二十五年)の出版を行つた。かくて二十六年九月には一茶保存会の主催による盛大な百二十五年祭が柏原に営まれ、その記念集「一茶まつり」(二十六年)も刊行されるに至つた。併しながらこの期は始まつて以来日なお浅く、加えるに戦争の惨禍は未だ全く癒えず、到る処で研究の進展を阻んでいる為に、多くの成果を挙げるに至つていない。一切は今後に待たなければならないが、研究の方法や領域に新しい開拓が試みられて居り、やがて来るものに多くの期待がかけられている。厳密には新生をはらむ時期といえようかと思う。

この期において最も活躍しているのは栗生純夫であろう。「科野」誌上にほとんど毎号「一茶随想」その他の論考を発表し、新資料の一茶遺稿「まん六の春」(二十四年十一月)や西原文虎の「一茶翁終焉記」(二十五年十一月)の紹介等をも行つている。この中「まん六の春」は一茶の晩年を考察する上の貴重な資料である。単行本としても「父の臨終

記」（「一茶選書」二十一年）、「おらが春」（同、同年）、「新校八番日記」（同、同年）、「一茶の生涯」（同年）等を矢継早に出した。その他栗山理一「一茶」（二十三年）、栗林一石路「小林一茶」（二十四年）、山下清三「一茶の哲学」（二十六年）もそれぞれ異色ある書であるが、この期の最も大きな収穫は川島つゆ「一茶」（二十一年）であろう。一茶の人間像を「江戸住時代」「離郷事情」等八つの項目に分つて考察し、それがおのずから一貫した一茶評伝を形成するように計画された犀利な研究であり、「一茶の種々相」を更に深めた多くの見解がうかがわれる。

諸書・講座類に見える研究には栗生純夫「小林一茶伝」（信濃毎日新聞社刊行「信州人物記作家伝」、二十四年）、臼井吉見「蕪村一茶」（河出書房版「日本文学講座」近世の文学、二十五年）、尾沢喜雄「一茶家系考」（「岩手大学学芸学部研究年報」第二巻、二十六年）の外、前記「一茶まつり」に収められた「諸家の一茶研究」がある。ここには西尾実「一茶の文学史的位置」、金原省吾「一茶」、尾沢喜雄「一茶研究史に連る人々—山崎素郷と小林五雲」、西山隆二「一茶と蕉集」、山崎喜好「一茶の連句から」等十九氏の研究が収められてある。

雑誌掲載論文はその大部分が「科野」に集つている。「科野」は二十一年以来毎年一茶特輯号（二十一年十・十一・十二月、二十二・三・四年各十一月、二十五年十一・十二月、二十六年九・十月）を出だす外、ほとんど毎号一茶関係の記事を掲げ、現在我が国唯一の一茶研究誌の観を呈している。それらの中から主要なものを挙げれば、頴原退蔵「一茶の句と方言」（二十一年十一月）、関口彦一郎「木槿集と何丸」（同）、黒沢隆信「一茶の教養」（同年十二月）、栗生純夫「一茶と田川鳳朗」（二十二年十一月）、高津才次郎「一茶の伊豆入」（同）、宮城謙一「一茶句のうつくしといふ語について」（二十三年十一月）、宮田戊子「一茶句の再検討」（二十五年十一月）、川島つゆ「一茶の寛政紀行」（同）、尾沢喜雄「一茶の系図について」（同年十二月）、山崎喜好「一茶の連句について」（二十六年十月）等である。川島、黒沢、栗生、高津、宮城の諸氏にはこの外にも多くの好研究がある。その他の雑誌に見えるものでは勝峯晋風「一茶と渋の湯」（「雲母」二十一年三月）、長沢奇峰「利根川国志の一茶」（「若草」二十四年三月）、塚田六郎「蕪村と一茶の近代性」（「鹿火屋」同年五・六月）、川島つゆ「最近の一茶研究」（「芭蕉研究」復刊第一号、二十六年十二月）等があり、最近では「信濃教育」が一茶特集号（二十七年二月）を出し、伊藤正雄「一茶あれこれ」、小池直太郎「一茶と民間文芸」、土屋弼太郎「一茶叢書の完成を望む」、栗生純夫「一茶句にあらはれた階級、職業」、山崎喜好「一茶の庶民性」、中村白民「一茶と郷土性」、金原省吾「一茶」、川島つゆ「再び雀子の吟について」、尾沢喜雄「一茶研究史覚書」池田忠「一茶と少年読物」等の論文を収めている。

十

思うに一茶研究史の中心課題は俳人としての一茶像の探究にあつた。換言すれば、一茶研究発足の当初において、単に奇行に富んだ滑稽洒落な俳人（嘉永版「一茶発句集」序、「おらが春」序跋）と認められていた一茶が、その滑稽俳人としての一面を保有しつゝ、信仰の人（春

秋庵幹雄「俳諧名誉談」)、儒家(飯島虚心「俳諧寺一茶」)、諷刺家・隠逸の高士(宮沢義喜・同岩太郎共編「俳人一茶」)、不平家・熱血の人(正岡子規「一茶の俳句を評す」)、人情の人(岡野知十「一茶の行状」)、人生の失敗者(佐々醒雪「俳諧寺一茶」)等と次第にその人間像の一面を更新しつゝ、やがて露香の「俳諧寺一茶」に至つて笑の中に涙を湛える瓢逸の詩人としての一茶像に一応完成せられ、更に欺かざる詩人(会津八一「一茶研究眼の変遷」)、煩悩人(相馬御風「一茶と良寛と芭蕉」)、ルンペン作家(高倉輝「一茶の生涯とその芸術」)等を経て、農民詩人(伊藤正雄「小林一茶」)としての一茶像に到達する道程に一茶研究史の展開があつたとも云えようかと思う。このような多様な一茶像が描き出された理由については、研究発足当初における資料の貧困、一茶研究者の多様性、一茶の個性の複雑さ、時代思潮の変化等いろいろであろうが、又一面一茶研究者が如何に執拗に一茶像の究明に取り組んだかを物語るものでもあつた。

そして草創期において究明された一茶像の最後の帰結が東松露香の「俳諧寺一茶」に見られ、興隆期反省期を通ずる一茶像の完成が伊藤正雄の「小林一茶」に示され、これら研究資料の一大集成が信濃教育会の「一茶叢書」によつて成されているとするならば、一茶研究史の焦点をこの三つに求めることも出来ようかと思う。一茶研究史のこのような方向は恐らく一茶考察の大道であつて今後も真剣に追究されるべき課題であり、何れの日か新生期以降の研究を結集する新しい一茶像の完成が期待される。

十一

而して正しい一茶像が形成される為には、一茶の人と作品の全面にわたつて、より徹底した考察が必要なことは今更言うまでもあるまい。従来の一茶研究は、人としての一茶の探究に主点が置かれ、作品の全面的組織的な検討は閑却され勝であり、そこに不十分な点が少くなかつたように思う。もとより作品研究に於ける正岡子規・荻原井泉水・松原地蔵尊・勝峯晋風・川島つゆ・伊藤正雄等の諸氏の勝れた業績は十分認められなければならないが、何れも俳句だけに止まつていて、作品の全体に及ばない憾みがある。その他の諸研究には作品に即さない概念的論考が多いようであり、これを一茶の人に対する研究と比較する時、露香の「俳諧寺一茶」を始めとする、一茶の生涯や性格の精細を極めた研究の盛行には及ぶべくもない。かゝる現象は、人々の関心が主として一茶の悲惨な生涯や特異な性格に懸つているところから来る自然の傾向であろうが、一茶研究の跛行性を示すもので、決して望ましい行き方とは言えない。従来の一茶像が、作家像としてよりも単なる人間像としての面を強く露呈し勝だつたのは、主としてこれに基ずくのである。

今後の一茶研究は、人に対する研究を更に深めるべきは勿論、作品の研究が一層強力に押し進められ、単に俳句のみならず、連句、俳諧歌、文章等作品の各分野にわたつて一つ一つ着実な考察が展開されると共に、「旅拾遺」「さらば笠」「三韓人」等の撰集、「寛政紀行」「父の終

焉日記」「おらが春」等の紀行随筆、「七番日記」「九番日記」等の句日記、「方言雜集」その他の言語研究など、纏つた著作に対してもその全内容が分析解明されなければならない。しかもこれらが年代順に整理され、全作品の史的聯関が明きらかにされる必要がある。こうして一茶作品の特質並びに成長の跡ははじめて確実に把握されるであろう。一方人に関する研究の進展はこのような作品研究を遂行する上に大きく寄与すると共に、作品の研究から見られる俳人一茶の認識を一層確実にする為に役立たなければならない。更に一茶を生み出した時代や環境の考察を行い、時代や環境によつて一茶が如何に培われたかを考察すべきであろう。一茶の人と作品と時代環境に対する研究が一方に偏ることなく、有機的に聯関するところに真の一茶像が形成せられ、そこから正しい一茶観が生れて来るのである。由来一茶に対しては、これを異常に高く評価しようとする立場と、これを過少に位置ずけようとする立場と極端な二つの立場が対立しているが、このような対立も如上の研究の進展につれて自然に解決の道を見出すことと思う。

このように論じ来つて再び一茶研究の現状を顧る時、問題は独り作品研究の上にあるばかりでなく、人の研究の領域にも空白や不明瞭の箇所を多く有して居り、時代環境の研究に至つてはほとんど未開拓の広大な分野を残している。一茶研究到達の彼岸はなお遙かにして遠いと言わなければならない。

附　記　本稿は「信濃教育」一茶特集號（昭和二十七年二月）に依頼を受けて執筆した「一茶研究史覺書」に據り、これに多くの訂正と加除を行つたものである。

研究者の氏名には一切敬稱を省いたことを宥恕されたい。